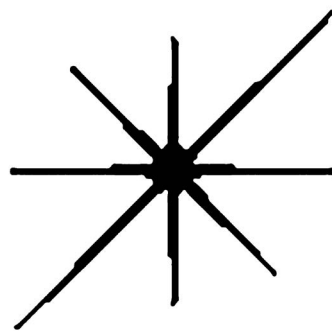


コメット通信 63

['25 年 10 月号]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

【特集 「国語辞典」の現在地】

アーデルングの『ドイツ語辞典』(1793-1801 年)

——「私はこの神託者にいろいろとたずねてみたい」

高田博行—————3

日本の辞書の現在・過去・未来

今野真二—————5

「寄り添わない」辞書

——見える信頼をつくれるか

見坊行徳—————7

学習者用の「国語辞典／日日辞典」の現在地

石黒圭—————9

【特集 「国語辞典」の現在地】

アーデルングの『ドイツ語辞典』（1793-1801 年）

——「私はこの神託者にいろいろとたずねてみたい」

高田博行

世の中には、心理描写がこまやかでついつい感情移入してしまうような辞書記述が存在する。『新明解国語辞典 第八版』の「恋愛」の説明に、筆者は読み入ってしまった。

【恋愛】 特定の相手に対して他の全てを犠牲にしても悔い無いと思ひ込むような愛情をいだし、常に相手のことを思つては、二人だけでいたい、二人だけの世界を分かち合いたいと願ひ、それがかなえられたと言つては喜び、ちょっとでも疑念が生じれば不安になるといった状態に身を置くこと。

このような繊細なニュアンスを捉えた語釈は、時空の異なる 18 世紀末ドイツの国語辞典にも見いだせる。アーデルング (Johann Christoph Adelung) による『高地ドイツ語の完全なる文法的・批判的辞典』(全 4 巻, 1793-1801 年, 見出し語約 55,000 語) である。タイトルにある「高地ドイツ語」というのは当時ほぼ確立していた標準ドイツ語のことで、「文法的」というのは文法的情報が記載されていることを指し、「批判的」とは語義を多角的に検討する姿勢を指す。ドイツの言語学者ヤーコプ・グリムはいみじくもアーデルングの辞典の強みを、「思慮深さを備え、見事な用例を整えた語義展開」(『ドイツ語辞典』序文, 『グリム兄弟言語論集』千石喬・高田博行編訳, 1854 年, p. 30) に見ている。アーデルングが Liebe 「愛」について行った「批判的」な語釈は、次のとおりである。

【Liebe】 誰かの幸福を喜び、それを可能な限り支援しようとする心の状態。純粹で無垢な愛。許されない愛, 利己的な愛。自然な衝動から生じる盲目的な愛 [...], 神が被造物に対して抱く愛, [...] 誰かに対して愛情を抱くこと, そのひとに多くの愛情を示すこと, その人に多くの愛情の証しを与えることなど。[...] 愛は, 頼む心と畏敬の念がなくなると, たちまち消える。

『新明解国語辞典』は、「ね」「よ」「さ」「な」「まあ」「だって」「でも」のような小さなことばの用法も取りこぼさない。例えば、終助詞の「さ」は次のように記述される。

【さ】 一, 相手に強く主張(反駁)する気持を表わす。「そんな事あたりまえさ [...]」二, 相手ほどむづかしく(深刻に)事態をとらえる必要がないという気持を表わす。「まあ, いいさ [...]」三, 「[...]とさ」「[...]ってさ」の形で] 自分が直接経験した事ではないので真偽については責任を負いかねるという気持を表わす。「昔 昔, おじいさんとおばあさんがあつたとさ [...]」四, 「不定の疑問文末で用いて」相手の言動や態度に対して幾分かの不信感をいだく気持を表わす。「どこへ行ってたのさ [...]」五, 「文節の切れ目につけて」相手に念を押すような時の, また, 次の語句を言いよどんでいる時のつなぎの言葉として用いる。「それがさ, まずい事にさ, 相手に分かっちゃったんだ [...]」

日本語の終助詞がそうであるように、それが用いられることで会話文が会話文らしく聞こえ、会話が潤滑に進行するような語がドイツ語にも存在する。「心態詞」(Modalpartikel) と呼ばれる小辞がそうで、話し手の主観的心情を反映する。例えば Komm nur nach Hause! 「まあ家に帰っていいよ」という文のなかにある nur (英 just, only) が心態詞である。アーデルングは、心態詞を初めとして会話に頻出する一連の小辞について行き届いた記述を行っている。これらの語は、話し手のそのときどきの感情や心的態度を反映するものであるため記述が容易ではない。例えば心態詞 nur のニュアンスを、アーデルングは以下のように記述している。

【nur】 […] 3) 許可: Thue es nur. 「まあそうしていいよ」 […] 4) 励まし: Thue es nur auch. 「さあそうしておけよ」 […] 5) 心配する気持ちと結びついた願望: Wenn er nur käme! 「彼が来さえしてくればなあ」 […] 6) しばしば、話題の対象を広げて一般性を強調して、あらゆる例外を排除するために用いられる: Wer nur kommt, der wird aufgenommen, ein jeder welcher kommt. 「およそ来る人は誰でも受け入れられる。どこの誰でも。」 […] さらに他に、きわめて多くの用法がある。生きている言語の小辞のすべての意味について、すべての陰影を列挙し、同義の表現で言い換え尽くすことなど、いったい誰ができるであろうか。さまざまな用法の派生元となるような最も主要な用法を見出し、それをある程度明確にできたなら、語彙の研究者としては満足しないといけない。

上の項目でアーデルングが最後に付け足した、辞書編纂者としての達観を目の当たりにして、国語辞典の奥深さに気づかされる。優れた国語辞典は、ネイティブスピーカーが潜在的にもっている語感を顕在化させて体系的につまびらかにするが、いくら奮闘しても語感の近似値でしかない。ただそうではあっても、辞典の利用者が自らの体験と照合しながら追体験できるような、深く共感できる描写、今風に言えば「刺さる」描写となっていることで、その記述は語感の核心を利用者に見せることができているのではないか。

ゲーテとシラーは同時代人として、何度かアーデルングの辞典に言及している。シラーはゲーテ宛の手紙(1804年1月26日付)のなかで、アーデルングの辞典を貸して欲しいと懇願し、「私はこの神託者〔辞典のこと〕にいろいろとたずねてみたい」と書いている。「いろいろと」のなかには、綴りや文法的情報を参照することもあったであろうし、また文学者として語義の陰影を知るべく項目を読み進めることもあっただろう。シラーがアーデルングの辞典を「神託者」に見立てたのは、アーデルングのペン先には語感がいわば憑依していて、機微をうがつテキストが姿を現していると期待したからかもしれない。

執筆者について――

高田博行(たかだひろゆき) 1955年生まれ。学習院大学名誉教授。専攻＝近現代ドイツ語史、歴史語用論。主な著書には、『ヒトラー演説――熱狂の真実』(中央公論新社、2014年)、『言語の標準化を考える――日中英独仏「対照言語史」の試み』(共編、大修館書店、2022年)などがある。

【特集 「国語辞典」の現在地】

日本の辞書の現在・過去・未来

今野真二

辞書を「語る」ための整理

「辞書」が一般的にどのように認識されているかを『岩波国語辞典』第8版（2019年）によって確認してみることにする。実は『岩波国語辞典』は「じしょ（辞書・字書）」を見出しにしているが、そこには語釈が記されておらず、「じてん（辞典）」を参照するように指示がある。見出し「じてん（辞典）」の語釈は①②③に別れており、①は「辞典」、②は「字典」、③は「事典」を説明している。①の語釈には「言葉を一定の順序に並べ、その発音・意味・用例などを説明した書物。辞書」とある。

ここまでするならば、『岩波国語辞典』第8版は「辞書」と「辞典」を区別せず、「辞典」「字典」「事典」をある程度区別していることになる。本稿は辞書を「見出し＋語釈」という枠組みでとらえることにする。適切な枠組みを設定しなければ、議論は空疎なものになりやすい。

引用した『岩波国語辞典』のような、見出しが10万語前後のものは、小型の国語辞書、総項目数50万、用例数100万を謳う『日本国語大辞典』第2版（小学館）は大型の国語辞書、『広辞苑』『大辞林』『大辞泉』は中型の国語辞書ととらえることにしたい。

過去の日本の辞書

弘法大師空海（774-835）が編んだと考えられている『^{てんれいばんしやうみやうぎ}篆隸万象名義』という、単漢字（＝漢字1字）を見出しにした「漢字字書」があるが、この辞書は中国の辞書のダイジェスト版のような辞書であった。

平安時代初期の昌泰年間（898-901）に、^{しやうたい}昌住という僧侶によって編まれた『^{しやうじゆう}新撰字鏡』という辞書がある。この辞書は、現在出版されている「漢和辞書」にややちかい体例を採っている。また、承平4（934）年頃に、^{わみやうるいじゆうしやう}源順が編んだ『和名類聚抄』という辞書がある。この辞書は、中国語（＝漢語）を見出しとしており、「中国語日本語対訳辞書」という趣がある。

江戸時代までに編まれた日本の辞書のほとんどが、単漢字を見出しとして、（当該漢字があらわす中国語の）発音や意味を示す「漢字字書」もしくは中国語（＝漢語）の語義を示す「中国語日本語対訳辞書」であったことは案外と認識されていないと思われる。日本語を母語とする人々にとって、切実に知りたい情報は漢字・漢語に関する情報であった。日本語母語話者は、辞書を調べて、母語である日本語の発音や語義を知る必要はそもそもあまりないであろう。そのことは基本的に現代においてもあまりかわらないといえるだろう。「国語辞典の現在地」が今回の特集のテーマだが、そのテーマは「国語辞書・国語辞典」は日本語母語話者にとって（どのような面で）必要か、という根本的な疑問を含んでいるとみることもできる。

アーカイブとしての辞書

先に掲げたように、『岩波国語辞典』第8版は見出し「じてん（辞典）」の語釈①には「用例などを説明した」とある。例えば、見出し「しと（使徒）」の語釈中に「平和の一」とある。「一」に「しと

(使徒)」を入れると「平和の使徒」という表現になる。これが小型の国語辞典の「用例」で、見出しとなっている語の使い方をごく簡略な形式で示している。

一方、大型辞書である『日本国語大辞典』第2版の見出し「しと(使徒)」には改訂増補『哲学字彙』や改正増補『和英語林集成』といった辞書に、この「しと(使徒)」が使われていること、森鷗外『即興詩人』において「使徒と聖母とは不便なる人類のために」とあることが示されている。こうした例によっても、見出しとなっている語の使い方がわかるが、それよりも、これらの例は、見出しとなっている語がこれまでにどのように使われたか、という記録のようなものといってよい。こうした「日本語のアーカイブ」としての辞書は、日本語の記録として今後もどうしても必要になるだろう。『日本国語大辞典』は「使徒と聖母とは不便なる人類のために憐を乞はんとて手をさし伸べたり」という一つの文の途中までを使用例として示しているが、「文」が言語のまとまった単位であることからすれば、こうしたことは「日本語のアーカイブ」であれば望ましくない。「来るべき辞書」が電子的な辞書となって、紙に出力されないのであれば、辞書の「規模」(＝頁数)はあまり問題にならなくなる。

また、『日本国語大辞典』にもそうした傾向はないとはいえないが、「青空文庫」やその他のコーパスなどのデータは文学作品を素材として構築されていることが多い。「日本語のアーカイブ」ということになれば、文学作品以外の言語素材のデータ化を進めていく必要があるだろう。特に「かきことば」に混ぜ用いられている「はなしことば」には注意する必要があると考える。

誰が辞書を編集するのか？

明治24年に刊行を終えた『言海』は当初官版として出版されることになっていた。しかし、結局は大槻文彦が自費出版をした。高橋五郎の『漢英対照いろは辞典』、大槻文彦の『言海』のように、辞書は編纂者の固有名詞と結びつけて「語られる」ことが多い。辞書編纂者が語彙のユニークさを競い、辞書の「読み手」がそれを楽しむ、ということはあってもよいかもしれないが、「大先生」を離れた辞書が編まれる時が、もうそこまで来ているようにも思われる。筆者もこの文章の読者も、100年後に編まれた辞書を見ることはできないだろうが、はたしてどんな「かたち」になっているのだろうか。それを想像することは楽しい。

執筆者について――

今野真二(こんのしんじ) 1958年生まれ。現在、清泉女子大学教授。専門＝日本語学。主な著書には、『辞書をよむ』(平凡社、2014年)、『『広辞苑』をよむ』(岩波書店、2018年)、『日本とは何か――日本語の始源の姿を追った国学者たち』(みすず書房、2023年)などがある。

【特集 「国語辞典」の現在地】

「寄り添わない」辞書

——見える信頼をつくれるか

見坊行徳

10月16日は「辞書の日」だ。1758年に生まれた米国の辞書編纂者ウェブスターの生誕を記念したこの日になると、毎年、SNSでは辞書を話題にした多くの投稿が見られるのだが、「今では辞書を使わない」とか「スマホで検索する」といったリアルな声に接しては肩を落とすのが年中行事となっている。最近ではそこに「生成AIで十分」が加わってしまった。

質問すれば答えてくれる生成AI（大規模言語モデル）の便利さは認めないわけにはゆかない。意味や漢字の書き方を聞いてもいいし、難しい文章をアップロードしてキーワードを解説してもらうこともできる。「いま・ここ」に必要な内容と伝え方で、即座に情報を提供する。辞書にまだない新語・俗語やユニークな比喩なども、人間のように推論して正しく解説してみせる（AIにネット検索などをさせない条件であっても）。AIの一課金ユーザとしては頼もしい限りだ。と同時に、国語辞書の編纂に携わる身には憂鬱でもある。辞書は言語に関する情報を網羅的・客観的にまとめて紙面に掲載するが、それは固定されていて、読者の「いま・ここ」に応じて手を変え品を変え、とはできない。

しかし感心させられるケースも少なからずある一方で、AIの答えはしばしば、怪しい。誤解・誤読（らしきもの）に基づいた変な回答に、手を焼きながらも内心ほくそ笑む。辞書は信頼感が売りだが、AIは、なぜそういう出力結果になるのか究極的にはわからない。不透明感是不信感につながる。

ところがいざ辞書をひもとくと、たいていの記述は簡潔極まる。掲載された語釈がなぜそうになっているかの根拠や経緯は説明されない。ふと、これは読者にとってみれば、生成プロセスがブラックボックスと化しているAIとそう変わらないのではないか、という疑問が頭をもたげる。いやそれどころかAIは、モデルやUIによっては推論の過程を表示する。答えが気に入らなければ、理由（らしきもの）を問い詰めることもできる。説明を「鵜呑み」にするしかない辞書より良さそうではないか。もはや辞書の信頼性はブランドや権威によって支えられているだけなのか……。

とはいえ、2つの「ブラックボックス」は中身が違う。辞書の短い記述は統計的に生成されるわけではなく、背後には客観性と妥当性を担保するための体系的なプロセスが存在する。辞書づくりの第一歩は用例採集という、実際に使われていることばを集める作業である。メディア、書籍、ネット、看板、会話……対象はあらゆる範囲に及び、集めた用例は見出し語や語義を客観的に検討するための欠かせない材料になる。執筆した語釈の原稿はさらに、別の編纂者や編集者などによって揉まれる。刊行後も、改訂の機会に恵まれれば、さらにブラッシュアップが重ねられる。説明を確かなものにするために培ってきた仕組みが辞書にはある、と声を大にして言わなければならない。

それから、AIは同じ問いにも違う答えを返すようなゆらぎがある。ユーザに「寄り添う」という個別性・流動性は、裏を返せば典拠たり得ないという弱点になる。対して、辞書の「寄り添えなさ」、すなわち情報が固定されているという性質は、別の強みを持つ。辞書の役目は、世間に定着しいわば当たり前となったことばの意味や使い方の記述だが、そうした情報には本来形がない。その当たり前でも捉えどころのないものに形を与える点に、辞書づくりのプロセスの価値が見出される。記述の中身に賛成にせよ反対にせよ、まずは同じ基盤に拠って立つことが建設的な思考や対話の起点となる。すべてが個別的体験になってしまうAIとのセッションと異なり、短くまとめ上げられた辞書の語釈

には「初めの一步」としての再現性がある。

以上のように内実には差がある。しかしながら、読者に提示される記述においては裏側が見えず、まして AI のほうが親切げに振る舞うとあっては、辞書が不利なことには変わりがない。プロセスそのものは紙面には掲載されず「陰の努力」と化している。であれば、見出し語を立項するに至った理由、語釈を決定する際に参照した主要な用例、類語との違いをどう解釈したか、といった編集上の判断とその理由を項目内に記録するのも一案だ。オマケとして苦勞談をひけらかすのでは決してなく、いかなる哲学や価値観の上に、どのような論拠で記述が組み上げられたかを共有することが価値になる。AI にない検証可能性は辞書に信頼性を与える。寄る辺なき AI には、そのような固定した足場をアンカーとしたうえで、読者が辞書の情報を最大限に活用するためのインターフェイスとして活躍してもらいたい、と思っている。

現実的には、限られた紙面でプロセスを事細かに明かすのは困難を伴う。紙幅に制限のないデジタル辞書であっても、長々とあけっぴろげにするばかりがよいこととは限らない、という気もする。紙面の外で関係者が語ったりすることも、辞書なるもののあり方を知っていただき、信頼を得るためには必要だ。本稿もまたそうした試みの一つであり、このように貴重な議論の場をいただけたことに深く感謝する。

執筆者について——

見坊行徳（けんぼうゆきのり） 1985 年生まれ。校閲者。YouTube チャンネル「辞書部屋チャンネル」を運営。主な著書には、『辞典語辞典——辞書にまつわる言葉をイラストと豆知識でずっしりと読み解く』（共著，誠文堂新光社，2021 年），『三省堂国語辞典から消えたことば辞典』（共編，三省堂，2023 年）などがある。

【特集 「国語辞典」の現在地】

学習者用の「国語辞典／日日辞典」の現在地

石黒圭

「国語辞典」は昭和の時代、書店の花形であった。事実、よく売れてもいた。私が学生時代、大型書店の平台に、山のように積まれた『広辞苑 第〇版』という文字を見て、そこにある種の権威を感じた記憶がある。また、思いきって財布からお金を取りだし、分厚い『広辞苑』を手にして家に帰る途中、高揚感を覚え、家に着いてから引いてみて、「こんな言葉まで載っているのか」という興奮と頼もしさを感じた感覚も鮮明に残っている。

しかし、令和の時代、私たちは辞書を引かなくなった。紙の辞書をもう何年も手にしていない方は少なくないだろう。私は今、ふと英語の「predator」と「prey」、どちらがどちらかわからなくなり、パソコンで検索してみた。Google の検索窓に「predator 意味」と入れると、「捕食者」と出てきた。また、「捕食者」は日本語でどう説明されているのか、気になって「捕食者」とだけ入れてググってみると、ホームメイト・リサーチによる「動物園用語辞典：捕食者」のページが最初に現れ、こんな説明が示されていた。

「捕食者」とは、ある動物に対しそれを捕獲し、食物として食べる動物のことを指す。食べる側の生物を「捕食者」、食べられる側の生物を「被捕食者」と呼び、これらの関係性を表す言葉が「食物連鎖」である。生態系の中で、捕食者は同時に被捕食者であることが多く、その捕食者の中でも最も強い生物を頂点捕食者と言う。

ここには、「捕食者」である「predator」だけでなく、「被捕食者」である「prey」の説明も出ており、その動的な関係を表す「食物連鎖」まで示されている。しかも、説明はそこで終わらず、「捕食者は同時に被捕食者である」と続き、たとえば、ツバメの場合、捕食する餌である昆虫にたいしては「捕食者」であるが、捕食される鳥類、天敵であるカラスにたいしては「被捕食者」となることがわかる。都心における「頂点捕食者」はカラスであり、このため、増えつづけるカラス被害にたいし、当時の石原慎太郎都知事がカラスの数を減らす「カラス対策プロジェクト」を2001年に打ち出したのかと、最近また増えつつある街中のカラスを眺めながら納得できる内容となっている。紙の「国語辞典」を使わなくても、インターネットの簡単な検索だけでここまで体系的な説明が得られるわけで、「国語辞典」の現在地が、令和の時代は大幅に後退していることがわかる。

では、「国語辞典」が不要なのかと問われると、そうではないと私は考えている。なぜか。それは、私たちが世界を理解し表現するときに日本語という言葉を使っているからである。もし私が「捕食者」という言葉を知らなければ、そもそも検索ができなかったわけで、「捕食者」という言葉を知るために辞書は有用だからである。国語力はすべての教科の基盤であると言われるとおり、言葉は人間の知性を形作る。

小学生は教科書で「捕食者」という言葉に出会い、その意味がわからなかった場合、紙の国語辞典を使って意味を調べる。分厚い紙の辞書に付箋を挟み、マーカーで線を引き、ぼろぼろになるまで使いこむことで、国語辞典の言葉が頭に入り、語彙を自分のものにできる。体感で言葉を習得する場合、紙の国語辞典を用いた辞書引き活動は効果的である。

また、日本語を第一言語としない、いわゆる外国人の日本語学習にも辞書は有用である。たとえば、米国人が日本語を学習する場合、日本発の和英辞典や英和辞典の逆用も可能であるが、日本語のレベルが上がってくると、学習者用日本語辞典である「日日辞典」がほしくなる。日日辞典は国語辞典とは異なり、比較的易しい数千語の日本語だけで見出し語を定義している辞書である。日本語学習者にとって、語釈に使われている日本語が難しい国語辞典はハードルが高い。その点、日日辞典であれば、基本的な語で説明されているので頭に入りやすく、日本語を日本語で考えることで、日本語の運用力も身につく。英語学習に役立つ「英英辞典」であれば、『Cambridge Advanced Learner's Dictionary』や『Longman Dictionary of Contemporary English』など有力なものが複数存在するが、残念ながら、日本語の包括的な日日辞典はいまだ存在しない。このため、日本語学習者はスマホやネットのアプリを苦労して使いながら日本語を学んでいる現状がある（石黒圭・吉甜・佐野彩子編『スマホは辞書になりうるか』明治書院、2024年を参照）。

しかし、そうした日日辞典ができれば、外国語として日本語を学ぶ学習者はもとより、日本語を学ぶ発達過程にある日本の子どもたちにも役に立つはずである。詳細は、石黒圭編『理想の辞書を求めて』（明治書院、2025年）に譲るが、学習に役立つ日日辞典には、単に意味を調べる辞典とは異なるさまざまな工夫が必要であり、ここに辞書の現在地を前進させる大きな余地がある。従来の国語辞典の開発は行き詰まりが見られるが、学習者用辞典の開発という観点から見た「国語辞典」の現在地には、明るい未来につながる地平が広がっているというのが私の見立てである。

執筆者について――

石黒圭（いしぐろけい） 1969年、大阪府に生まれる。現在、国立国語研究所教授、総合研究大学院大学教授。専攻＝日本語学。主な編著書に、『スマホは辞書になりうるか』（共編、明治書院、2024年）、『理想の辞書を求めて』（明治書院、2025年）などがある。

水声社の新刊

(2025 / 10 / 31)

【11月の新刊（予定）】

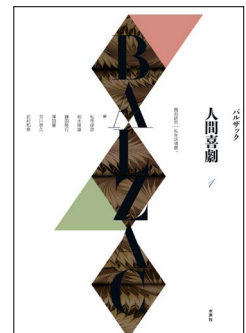
《人間喜劇 1》 風俗研究 私生活情景*

オノレ・ド・バルザック

私市保彦＋柏木隆雄＋鎌田隆行＋澤田肇＋芳川泰久＋岩村和泉訳 【11.13 発売】

▶バルザック自身の構想に沿い、あまりにも膨大な《人間喜劇》の全体像を邦訳によって明らかにしようとする初の試み。各作品に詳細な解題を付し、未完作品の構想や意図も丁寧に解説。第一巻には「ソーの舞踏会」「二人の若妻の手記」他を収録。

A5 判上製／ 819 頁／ 12000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0900-4



《日本しま紀行 1》 日本海の島々 (I)

——北海道・山形県・新潟県篇

乾政秀

【11.13 発売】

▶海洋環境と水産業の元コンサルタントが民間人の住む日本のすべての有人離島をめぐり歩いた紀行文集。荒波にさらされる島々の産業、文化、人々の暮らしのありさまを活写する珠玉の文章群。第一巻では利尻島、焼尻島、飛島、佐渡島をはじめとする北海道・山形県・新潟県の島々を巡る。

四六判並製／ 320 頁／ 3000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0920-2



日常のコレオ

東京都現代美術館編

【11.19 発売】

▶社会構造に組み込まれた暴力や抑圧の力学を可視化し、人々の経験、記憶、切望に光を当て、抵抗の身振りを生み出す創造性やユーモアをコレオグラフィ（振付）として描き出す。国内外約 30 組のアーティストの作品をフルカラーで掲載！

A4 判中綴じ／ 132 頁／ 2500 円＋税 ISBN：978-4-8010-0895-3



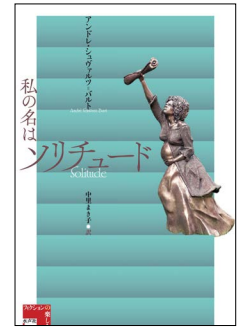
私の名はソリチュード 《フィクションの楽しみ》

アンドレ・シュヴァルツヴァルト 中里まき子訳

【11.27 発売】

▶ 奴隷船での暴力の果てに生まれた孤児は、妊娠中の身でありながらグアドループの森で解放の烽火を灯す。奴隷たちを率い処刑された実在の女性を描く、『さらばボゴタ』へと続くカリブ海連作の第二章。

四六判上製／182 頁／2500 円＋税 ISBN：978-4-8010-0899-1



交響するテキスト——文学・メディア・翻訳

杉本章吾＋江口真規編

【11.27 発売】

▶ 小説、映画、ドラマ、漫画、教典、劇……多様な地域・時代が紡ぎ出したあらゆる言葉を糸として、交織されたテキスト群。そこに聞こえる多層的な声と思想・文化の響きが、比較文学研究のダイナミズムを作り出す。

A5 判上製／432 頁／6000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0889-2



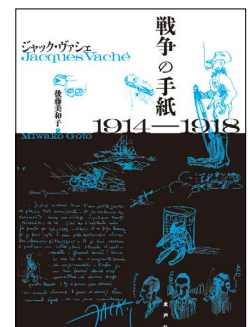
戦争の手紙 1914-1918

ジャック・ヴァシェ 後藤美和子訳

【11.27 発売】

▶ 第一次世界大戦の前線に立った若きシュルレアリストが、悲惨な現実をユーモアで転覆させ、ダンディズムによって己の輪郭を取り戻し、不条理な世界への絶対的な反抗を体現した書簡。シュルレアリスムをはじめアヴァンギャルド運動に絶大な影響を及ぼした 15 通に加え、現存する計 158 通を完全収録！

A5 判上製／400 頁／6500 円＋税 ISBN：978-4-8010-0890-8



亡命ロシア演劇

《水声文庫》

——ウクライナ侵攻後の亡命演劇とロシア国内の演劇

岩田貴

【11.27 発売】

▶ ウクライナ侵攻開始後に亡命したロシア演劇人たちは、侵略を続ける祖国と混迷を極める世界情勢に対して、いかなる演劇を作り出しているのか？ そして、国内にとどまった演劇人たちの運命は？ 最新のロシア演劇のレポート。

四六判上製／296 頁／3200 円＋税 ISBN：978-4-8010-0939-4



アートとエージェンシー 《叢書 人類学の転回》

——ある人類学的な理論

アルフレッド・ジェル

内山田康＋中谷和人＋吉田ゆか子＋深川宏樹＋渡辺文記

【11.27 発売】

▶アートはただ鑑賞されるものではない。エージェンシーを媒介し、わたしたちに働きかける。ポリネシアのイレズミ、切り裂かれたヴィーナス、アフリカの呪物、そしてデュシャン……時間と空間を縦横無尽に駆けながら芸術と人類学の関係を覆す反美学のエージェンシー論。

四六判上製／440 頁／5000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0938-7



【10 月の新刊（既刊）】

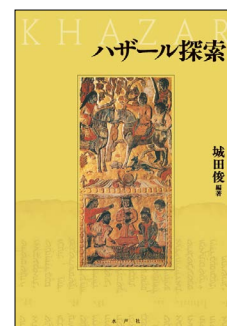
ハザール探索

城田俊＝編著

【10.13 発売】

▶ロシアやウクライナの地で繁栄した騎馬民族ハザール。ユダヤ教との関わりをはじめとする数多の謎を解明する、ハザール研究＝探索の最前線。ロシア人考古学者による最良の入門書『ハザール——謎の帝国』（プレトニョーヴァ著）、ハザールが遺した数少ない文字資料『ユダヤ・ハザール往復書簡』他を収録！

四六判上製／340 頁＋1C 別丁 8 頁／3500 円＋税 ISBN：978-4-8010-0776-5



太陽の都市

《イタリアルネサンス文学・哲学コレクション 6》

トンマーゾ・カンパネッラ 澤井繁男訳

【10.13 発売】

▶教会とスペイン帝国に対して武装蜂起を企図したカトリック僧が、獄中にて執筆したユートピア論。神政政治、結婚と生殖の管理、財産の共有、卓越した科学技術……千年王国到来の予感とともに夢想する、原始共産制社会の驚くべきビジョン。カンパネッラ専門家による鮮烈な新訳。

A5 判上製／160 頁／2700 円＋税 ISBN：978-4-8010-0406-1



『南回帰線』物語

——ヘンリー・ミラーと知られざるキリスト

本田康典

【10.24 発売】

▶ネルヴァル、ニーチェ、バルクソン、バルザック、ヘッセ、そしてブラヴァツキー夫人の諸著作との対話のなかで次第に自己の探究、アポテオシス（人間の神化）の探究へと向かうミラーの姿を、『南回帰線』はもちろん、公刊・未公刊の諸作品、ノート、メモ、書簡の類までをも博搜しつつ活写する。

四六判上製／277 頁／3000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0937-0



私の中の水

ミヤタタカシ

【10.28 発売】

▶水のめぐりに想いを馳せる女の子の、広大なスケールの心象風景を描いた1冊。静謐な文章にのびやかであたたかみのある絵が合わさった、大人も子どもも楽しめる絵本。

A4 判上製／48 頁／2000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0894-6



水声社

東京都文京区小石川 2-7-5 tel. 03-3818-6040 / fax. 03-3818-2437 eigyo-bu@suseisha.net

ブックカフェ



本の庭
le Jardin des livres

本の庭



緑と本に囲まれて、憩いのひとときをお過ごしいただける、都内でもまだ緑の多く残る山王のブックカフェ『本の庭』にも本格的な秋が訪れました。『本の庭』では、水声社の本を展示販売しており、新刊は本屋さんの店頭と並ぶより、10日から1週間ほど早く入荷します。「できる限り手作りの物を」をモットーに、パニーニやケーキ、など、店内の本をご自由にお読みいただきながら召しあがれる軽食、季節限定の焼菓子や各種スイーツやお飲み物をご用意しています。車椅子やベビーカーでお入りいただけます。テラスでは、ワンちゃんと共に過ごすことができます。

【カフェの情報】

住所：東京都大田区山王 1 - 22 - 16

アクセス：JR 京浜東北線大森駅 山王北口より徒歩7分

営業時間：木・金 12時～18時、土・日 11時～18時。ただし第1・第3日曜日は12時開店です。

営業日：木・金・土・日（急なお休みが入ることがありますので、詳しくはInstagramをご確認ください。）

TEL：070 - 4171 - 0860

店内設備：スロープを設置できますので、車椅子のままご来店いただけます。

Free Wi-Fi



本の庭
le Jardin des livres

（広告）